

「化石の卒業制作(2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka



なかなか質の良い「サメの歯の化石」である。先端も尖っていて、保存状態も良い。問題は、添付されていた説明書だ。説明書には以下のように書いてあった。

- ・サメの歯の化石
- ・中生代ジュラ紀(約1億5千万年前)
- ・モロッコ、コーブリカ

これは時代と地名が間違えている。モロッコに「コーブリカ」という地名はない。「コーリブカ」が正しい。「コーリブカ」は確かに、サメの歯の化石の産地だが、時代は「古第三紀 始新世」で約4千万年前というのが正しい。



最後の「新生代 第四紀」の化石が「星砂」である。「砂」といっても、岩石が風化した普通の砂とは全く成因が異なり。星砂はサンゴに棲む「有孔虫の殻」の

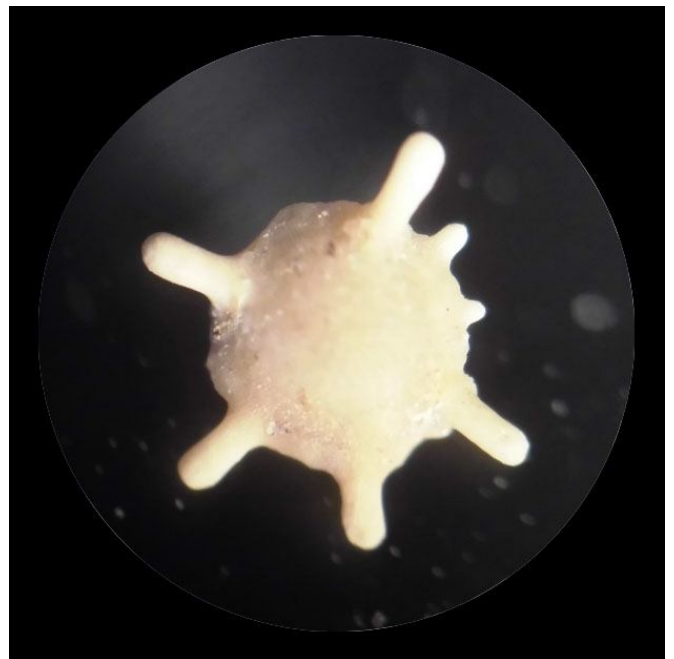
化石である。有孔虫は今でも普通に見られ、その殻も含まれるので、正確には、すべてが「化石」というわけではない。



星砂は沖縄県の竹富島や西表島に多く産する。現在現地では採取が難しくなっている。海辺の観光地の売店などで、小さなコルク栓付きのガラス瓶に入れて売っているのをよく見かける。しかし中身は5gほどしかなく、全員に配るのには量が全く足りない。

今回使った標本は、沖縄県うるま市の専門業者から、500gほど購入した。一人分は菓さじの小さいほう一杯で十分なので、これで余るほどである。

星砂に含まれる「有孔虫の殻」には、大きく分けて2種類のもが存在する。顕微鏡で撮影してみた。星砂は不透明なので、透過光では真っ黒に写ってしまう。反射光で撮影すると、立体感もよく表現できる。



この「機雷」のような形のもは、「カルカリナ」*Calcarina* という種類である。*Calcarina* は属名で、その中に何種類もあるのだが、素人には同定は困難である。和名は「タイヨウノスナ(太陽の砂)」というらしい。子どもたちに顕微鏡観察をさせたら「かわいい!」「お菓子みたい」「あ、金平糖みたいな形!」と大興奮の様子だった。